月夜のでんしんばしら

宮沢賢治

ある晩、恭一はぞうりをはいて、すたすた鉄道線路の横の平らなところをあるいて居(お)りました。

たしかにこれは罰金(ばっきん)です。おまけにもし汽車がきて、窓から長い棒などが出ていたら、一ぺんになぐり殺されてしまったでしょう。

ところがその晩は、線路見まわりの工夫もこず、窓から棒の出た汽車にもあいませんでした。そのかわり、どうもじつに変てこなものを見たのです。

九日の月がそらにかかっていました。そしてうろこ雲が空いっぱいでした。うろこぐもはみんな、もう月のひかりがはらわたの底までもしみとおってよろよろするというふうでした。その雲のすきまからときどき冷たい星がぴっかりぴっかり顔をだしました。

恭一はすたすたあるいて、もう向うに停車場(ていしゃば)のあかりがきれいに見えるとこまできました。ぽつんとしたまっ赤なあかりや、硫黄(いおう)のほのおのようにぼうとした紫(むらさき)いろのあかりやらで、眼(め)をほそくしてみると、まるで大きなお城があるようにおもわれるのでした。

とつぜん、右手のシグナルばしらが、がたんとからだをゆすぶって、上の白い横木を斜(なな)めに下の方へぶらさげました。これはべつだん不思議でもなんでもありません。

つまりシグナルがさがったというだけのことです。一晩に十四(じゅうし)回もあることなのです。

ところがそのつぎが大へんです。

さっきから線路の左がわで、ぐゎあん、ぐゎ

あんとうなっていたでんしんばしらの列が大威張りで一ぺんに北のほうへ歩きだしました。みんな六つの瀬戸もののエボレットを飾り、てっぺんにはりがねの槍をつけた亜鉛のしゃっぽをかぶって、片脚でひょいひょいやって行くのです。そしていかにも恭一をばかにしたように、じろじろ横めでみて通りすぎます。

うなりもだんだん高くなって、いまはいかにも昔ふうの立派な軍歌に変ってしまいました。

「ドッテテドッテテ、ドッテテド、
でんしんばしらのぐんたいは
はやさせかいにたぐいなし
ドッテテドッテテ、ドッテテド
でんしんばしらのぐんたいは
きりつせかいにならびなし。」

一本のでんしんばしらが、ことに肩をそびやかして、まるでうで木もがりがり鳴るくらいにして通りました。

みると向うの方を、六本うで木の二十二の瀬戸もののエボレットをつけたでんしんばしらの列が、やはりいっしょに軍歌をうたって進んで行きます。

「ドッテテドッテテ、ドッテテド
二本うで木の工兵隊
六本うで木の竜騎兵
ドッテテドッテテ、ドッテテド
いちれつ一万五千人
はりがねかたくむすびたり」

どういうわけか、二本のはしらがうで木を組んで、びっこを引いていっしょにやってきました。そしていかにもつかれたようにふらふら頭をふって、それから口をまげてふうと息を吐き、よろよろ倒れそうになりました。

するとすぐうしろから来た元気のいいはしら

がどなりました。
「おい、はやくあるけ。はりがねがたるむじゃないか。」
ふたりはいかにも辛そうに、いっしょにこたえました。
「もうつかれてあるけない。あしさきが腐り出したんだ。長靴のタールもなにももうめちゃくちゃになってるんだ。」
うしろのはしらはもどかしそうに叫びました。
「はやくあるけ、あるけ。きさまらのうち、どっちかが参っても一万五千人みんな責任があるんだぞ。あるけったら。」
二人はしかたなくよろよろあるきだし、つぎからつぎとはしらがどんどんやって来ます。
「ドッテテドッテテ、ドッテテド
やりをかざれるとたん帽
すねははしらのごとくなり。
ドッテテドッテテ、ドッテテド
肩にかけたるエボレット
重きつとめをしめすなり。」
二人の影ももうずうっと遠くの緑青いろの林の方へ行ってしまい、月がうろこ雲からぱっと出て、あたりはにわかに明るくなりました。
でんしんばしらはもうみんな、非常なご機嫌です。恭一の前に来ると、わざと肩をそびやかしたり、横めでわらったりして過ぎるのでした。
ところが愕ろいたことは、六本うで木のまた向うに、三本うで木のまっ赤なエボレットをつけた兵隊があるいていることです。その軍歌はどうも、ふしも歌もこっちの方とちがうようでしたが、こっちの声があまり高いために、何をうたっているのか聞きとることができませんでした。こっちはあいかわらずどんどんやって行

きます。

「ドッテテドッテテ、ドッテテド、
寒さはだえをつんざくも
などて腕木(うでぎ)をおろすべき
ドッテテドッテテ、ドッテテド
暑さ硫黄をとかすとも
いかでおとさんエボレット。」

どんどんどんどんやって行き、恭一は見ているのさえ少しつかれてぼんやりなりました。

でんしんばしらは、まるで川の水のように、次から次とやって来ます。みんな恭一のことを見て行くのですけれども、恭一はもう頭が痛くなってだまって下を見ていました。

俄(にわ)かに遠くから軍歌の声にまじって、「お一ー、お一ー、」というしわがれた声がきこえてきました。恭一はびっくりしてまた顔をあげてみますと、列のよこをせいの低い顔の黄いろなじいさんがまるでぼろぼろの鼠(ねずみ)いろの外套(がいとう)を着て、でんしんばしらの列を見まわしながら「お一ー、お一ー、」と号令をかけてやってくるのでした。

じいさんに見られた柱は、まるで木のように堅(かた)くなって、足をしゃちほこばらせて、わきめもふらず進んで行き、その変なじいさんは、もう恭一のすぐ前までやってきました。そしてよこめでしばらく恭一を見てから、でんしんばしらの方へ向いて、

「なみ足い。おいっ。」と号令をかけました。

そこででんしんばしらは少し歩調を崩(くず)して、やっぱり軍歌を歌って行きました。

「ドッテテドッテテ、ドッテテド、
右とひだりのサアベルは
たぐいもあらぬ細身なり。」

じいさんは恭一の前にとまって、からだをす

こしかがめました。
「今晩は、おまえはさっきから行軍を見ていたのかい。」
「ええ、見てました。」
「そうか、じゃ仕方ない。ともだちになろう、さあ、握手(あくしゅ)しよう。」
じいさんはぼろぼろの外套の袖(そで)をはらって、大きな黄いろな手をだしました。恭一もしかたなく手を出しました。じいさんが「やっ、」と云(い)ってその手をつかみました。
するとじいさんの眼だまから、虎(とら)のように青い火花がぱちぱちっとでたとおもうと、恭一はからだがびりりっとしてあぶなくうしろへ倒れそうになりました。
「ははあ、だいぶひびいたね、これでごく弱いほうだよ。わしとも少し強く握手すればまあ黒焦(くろこ)げだね。」

兵隊はやはりずんずん歩いて行きます。
「ドッテテドッテテ、ドッテテド、
タールを塗(ぬ)れるなが靴の
歩はばは三百六十尺。」
恭一はすっかりこわくなって、歯ががちがち鳴りました。じいさんはしばらく月や雲の工合(ぐあい)をながめていましたが、あまり恭一が青くなってがたがたふるえているのを見て、気の毒になったらしく、少ししずかに斯(こ)う云いました。
「おれは電気総長だよ。」
恭一も少し安心して
「電気総長というのは、やはり電気の一種ですか。」とききました。するとじいさんはまたむっとしてしまいました。
「わからん子供だな。ただの電気ではないさ。つまり、電気のすべての長、長というのはかしらとよむ。とりもなおさず電気の大将というこ

とだ。」
「大将ならずいぶんおもしろいでしょう。」恭一がぼんやりたずねますと、じいさんは顔をまるでめちゃくちゃにしてよろこびました。
「はっはっは、面白いさ。それ、その工兵も、その竜騎兵も、向うのてき弾兵も、みんなおれの兵隊だからな。」
　じいさんはぷっとすまして、片っ方の頬をふくらせてそらを仰ぎました。それからちょうど前を通って行く一本のでんしんばしらに、
「こらこら、なぜわき見をするか。」とどなりました。するとそのはしらはまるで飛びあがるぐらいびっくりして、足がぐにゃんとまがりあわててまっすぐを向いてあるいて行きました。次から次とどしどしはしらはやって来ます。
「有名なはなしをおまえは知ってるだろう。そら、むすこが、エングランド、ロンドンにいて、おやじがスコットランド、カルクシャイヤにいた。むすこがおやじに電報をかけた、おれはちゃんと手帳へ書いておいたがね、」
　じいさんは手帳を出して、それから大きなめがねを出してもっともらしく掛けてから、また云いました。
「おまえは英語はわかるかい、ね、センド、マイブーツ、インスタンテウリイすぐ長靴送れとこうだろう、するとカルクシャイヤのおやじめ、あわてくさっておれのでんしんのはりがねに長靴をぶらさげたよ。はっはっは、いや迷惑したよ。それから英国ばかりじゃない、十二月ころ兵営へ行ってみると、おい、あかりをけしてこいと上等兵殿に云われて新兵が電燈をふっふっと吹いて消そうとしているのが毎年五人や六人はある。おれの兵隊にはそんなものは一人もないからな。おまえの町だってそうだ、はじめて

電燈がついたころはみんながよく、電気会社では月に百石(こく)ぐらい油をつかうだろうかなんて云ったもんだ。はっはっは、どうだ、もっともそれはおれのように勢力不滅(ふめつ)の法則や熱力学第二則がわかるとあんまりおかしくもないがね、どうだ、ぼくの軍隊は規律がいいだろう。軍歌にもちゃんとそう云ってあるんだ。」

でんしんばしらは、みんなまっすぐを向いて、すまし込(こ)んで通り過ぎながら一きわ声をはりあげて、

「ドッテテドッテテ、ドッテテド
でんしんばしらのぐんたいの
その名せかいにとどろけり。」

と叫びました。

そのとき、線路の遠くに、小さな赤い二つの火が見えました。するとじいさんはまるであわててしまいました。

「あ、いかん、汽車がきた。誰(たれ)かに見附(みつ)かったら大へんだ。もう進軍をやめなくちゃいかん。」

じいさんは片手を高くあげて、でんしんばしらの列の方を向いて叫びました。

「全軍、かたまれい、おいっ。」

でんしんばしらはみんな、ぴったりとまって、すっかりふだんのとおりになりました。軍歌はただのぐゎあんぐゎあんというなりに変ってしまいました。

汽車がごうとやってきました。汽缶車(きかんしゃ)の石炭はまっ赤に燃えて、そのまえで火夫は足をふんばって、まっ黒に立っていました。

ところが客車の窓がみんなまっくらでした。

するとじいさんがいきなり、

「おや、電燈が消えてるな。こいつはしまった。けしからん。」と云いながらまるで兎(うさぎ)のようにせ中をまんまるにして走っている列車の下へもぐ

り込みました。
「あぶない。」と恭一がとめようとしたとき、客車の窓がぱっと明るくなって、一人の小さな子が手をあげて
「あかるくなった、わあい。」と叫んで行きました。
　でんしんばしらはしずかにうなり、シグナルはがたりとあがって、月はまたうろこ雲のなかにはいりました。
　そして汽車は、もう停車場（ていしゃば）へ着いたようでした。